



Title	アイヌ語の受動文に関する一考察
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北海道大學文學部紀要, 44(1), 1-18
Issue Date	1995-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33654
Type	bulletin (article)
File Information	44(1)_PL1-18.pdf



[Instructions for use](#)

Summary

The Ainu Passive

Tomomi Sato

It has often been suggested that in the Ainu passive the verb has the active morphology and that a construction like this is a kind of active construction. However, the Ainu passive is a so-called subjectless impersonal passive construction: the patient in the passive does not behave as the subject with regard to either the equi-NP deletion or the verb raising. Typologically, the Ainu impersonal passive is most similar to a Russian impersonal passive, but it is somewhat atypical and has a peculiarity in contrast with passives in other languages in the sense that the overt agent can also be expressed.

アイヌ語の受動文に関する一考察

佐藤 知己

1. はじめに

アイヌ語の名詞は格変化を持たず、主語や目的語は共に無標（格語尾、格助詞を伴わない形）のままである。従って、ある名詞句が主語であるか目的語であるかを述べることは必ずしも容易ではない。アイヌ語の受動文における、受動者を意味する名詞句もまた無標である。従って、アイヌ語の受動文の受動者は、名詞の格という形態的な手がかり（もっとも、これとても主語性を決定する絶対的な基準ではないが……後述）がない以上、別の基準によらない限り、主語とも目的語とも考えることができる。近年、アイヌ語の受動文の受動者に主語的な性格のあることが論じられているが（Shibatani 1990: 58-59）、本稿では、その分析の不備を指摘し、アイヌ語の受動文の受動者の統語的性質を再検討する。その上で、アイヌ語の受動文の受動者は、英語等の受動文における受動者とは異なり、やはり統語的に主語としては働かないことを明かにする。また、その結果を受けて、アイヌ語の受動文の類型論的位置について考察する。

以下のアイヌ語の例文は、特に断らない限り北海道日高支庁静内町出身の織田ステノ氏（女性、1900年生まれ、調査当時88歳、1993年没）によるものである。織田氏は両親に早くに死別され、母方の祖母の元（静内町農屋、アイヌ名 noyasar kotan）で育てられたため、10代までは殆どアイヌ語のみの生活をされていた由である。20代以降、日常生活では主に日本語を使用されるようになったが、口承文芸の伝承者として高名な方であり、アイヌ語の流

暢な話者であった。

今日、アイヌ語の話し手は極めて少なくなっており、テキストをできるだけ多く記録することはもちろんアイヌ語研究における緊急の重要課題である。しかし、それと同時に、様々な文法現象に関して、話し手の内省的、直感的判断も意識的に引出して、できる限り多く記録しておくべきであると考ええる。本稿は、そういった観点から得られた情報をも報告しようとした一つの試みでもある。

2. アイヌ語の動詞の人称表示

アイヌ語は動詞に主語や目的語の人称が表示される言語である。それらは人称接辞と呼ばれ¹⁾、図1のようにまとめられる²⁾。

	主 格	目的格	代名詞
1人称単数	ku-	'en-	ku'ani
除外的1人称複数	ci-(他動詞) - 'as(自動詞)	'un-	ci'oka
包括的1人称複数	'a-/'an-(他動詞) - 'an(自動詞)	'i-	'anoka
2人称単数	'e-	'e-	'e'ani
2人称複数	'eci-	'eci-	'eci'oka
2人称敬称	'a-/'an-(他動詞) - 'an(自動詞)	'i-	'anoka

図 1

これらの人称接辞、人称代名詞の用法について補足すれば以下のようなになる（以下の例文の語註においては、同一文中に複数回現れるものについては最初のものにのみ語註を付す）。

- a. 自動詞であれば、主語の人称が表示される。

- (1) 'e-'apkas 「おまえが歩く」: 'e- 2 人称単数主格, 'apkas 「歩く」
- b. 他動詞であれば、主語と目的語の人称が表示される。
- (2) 'e-'en-kosunke 「おまえが私をだます」: 'e- 2 人称単数主格, 'en- 1 人称単数目的格, kosunke 「だます」
- c. 人称代名詞は文の必須要素ではないので、以下のように強調の場合以外は現れない。
- (3) 'e'ani 'anak cise 'ot ta 'e-'an 「おまえは家にいる」: 'e'ani 2 人称単数代名詞, 'anak 「は」, cise 「家」, 'ot (<'or) 「場所, 所」, ta 「に」, 'e- 2 人称単数主格, 'an 「いる」
- d. 命令文においては、2 人称主格人称接辞は現れない。
- (4) 'en-ko'itak! 「私に話せ」: 'en- 1 人称単数目的格, ko'itak 「～に向かって話す」
- e. 除外的 1 人称複数 (聞き手を含まない「我々」), 包括的 1 人称複数 (聞き手を含む「我々」), 2 人称敬称では、主格人称接辞は自動詞に付くか、他動詞に付くかで異なる形をとる。
- (5a) 'apkas-'as 「我々 (除外的) は歩く」: 'apkas 「歩く (自動詞)」, -'as 除外的 1 人称複数自動詞主格
- (5b) ci-nukar 「我々 (除外的) は見る」: ci- 除外的 1 人称複数他動詞主格, nukar 「見る (他動詞)」
- (6a) 'apkas-'an 「我々 (包括的) は歩く」: 'apkas 「歩く (自動詞)」, -'an 包括的 1 人称複数自動詞主格
- (6b) 'an-nukar 「我々 (包括的) は見る」: 'an- 包括的 1 人称複数他動詞主格, nukar 「見る (他動詞)」
- f. 3 人称は主格, 目的格共にゼロ (ϕ -) である。

- (7) ku-kor katkemat tama ϕ - ϕ -e'iko'itupa 「私の奥さんが首飾りを欲しがる」: ku-1人称単数主格, kor「持つ」, katkemat「奥さん」, tama「首飾り」, ϕ -3人称主格, ϕ -3人称目的格, e'iko'itupa「欲しがる」

ここでは一応、動詞には主語や目的語の人称が表示される、と述べたが、以下で述べるように、厳密にはこれら動詞の人称表示は、あくまでも表層の形態レベルの現象としてとらえるべきもので、それが直接、統語構造を反映するとは限らないことに注意しなければならない。例えば、命令文には2人称主格の人称接辞が付かないが、より深いレベルではやはり仮定しなければならないだろう。

3. アイヌ語の受動文の基本構造

本論に入る前に、アイヌ語の受動文の構造を簡単に説明する。例文(8)の能動文に対応する受動文が例文(9)である。

- (8) nispa 'utar ϕ -en-tak 「旦那さんたちが私を招待する」: nispa「旦那さん」, 'utar「たち」, ϕ -3人称主格, en-1人称単数目的格, tak「招待する」
- (9) nispa 'utar 'or wa 'a-en-tak 「旦那さんたちに私は招待される」: nispa「旦那さん」, 'utar「たち」, 'or「場所、所」, wa「から」, 'a-受動, en-1人称単数目的格, tak「招待する」

上の例文(8), (9)との比較から明かなように、アイヌ語の受動文において動詞は受動を表す要素 'a- をとる³⁾。受動者(この場合「私」)は目的格(en-)のままである。また、能動文の主語 nispa 'utar「旦那さんたち」は、受動文では 'or wa「～の所から」を伴っており、主語から斜格に降格されていると考えられる(このような動作主を表す後置詞句は、必要のない場合には削除が可能である)。なお、受動の接頭辞 'a- は、意味的には1人称の意味から離れてはいるが、形や現れる位置の上では包括的1人称複数他動詞主格の 'a-

との類似が明かである。従って従来の記事では受動は1人称複数他動詞主格の'a-の用法の一つとされることが多い(この点については4節および6節でもふれる)。次に、受動者が3人称の場合をみる。

- (10) 'irara wenkur 'utar nispa ϕ - ϕ -'otke 「いたづらをする悪い人たちが旦那さんを刺す」: 'irara 「いたづらをする」, wenkur 「悪い人」, 'utar 「たち」, nispa 「旦那さん」, ϕ -3人称主格, ϕ -3人称目的格, 'otke 「刺す」
- (11) nispa 'irara wenkur 'utar 'or wa 'a- ϕ -'otke 「旦那さんがいたづらをする悪い人たちに刺される」: nispa 「旦那さん」, 'irara 「いたづらをする」, wenkur 「悪い人」, 'utar 「たち」, 'or 「場所, 所」, wa 「から」, 'a-受動, ϕ -3人称目的格, 'otke 「刺す」

また、既に述べたように、動作主が明示されない次のような文も可能である。

- (12) nispa 'a- ϕ -'otke 「旦那さんが刺される」: nispa 「旦那さん」, 'a-受動, ϕ -3人称目的格, 'otke 「刺す」

上の例文(10)から(11)では、受動者 nispa 「旦那さん」は、能動文、受動文で共に無標であるが、受動のマーカ-'a-が主格接頭辞の位置を占めることから、動詞は3人称目的格の ϕ -をとり、受動者 nispa はこれと文法的に一致するものと仮定される。このように、受動者 nispa が受動文においても目的語のままであることは、例文(8), (9)でみたように、受動者が1人称単数の場合、受動文において動詞の人称表示が目的格(en-)のままであったことから類推される。しかし、これらは主に形態的な基準に基づくものである上、人称接辞と名詞句が同じ文法的な振舞いをするかどうか、必ずしも保証の限りではない。受動文に統語的な意味での主語があるかどうかは、やはり統語的な基準によって決定されるべきであると考えられる。

4. アイヌ語の受動文に関する従来の見解

ここで、従来のアイヌ語研究において、受動文がどのようにとらえられて

きたかについて、簡単にふれて置きたい。結論を先に言えば、従来の研究は、受動文をもっぱら動詞の形態論の問題としてとらえてきたといえることができる。例えば、金田一(1931:132-3)は、受動文の動詞に接頭して受動を表す要素(a-)を「不定称」と呼び、「人々」という意味を表す、としている。また、知里(1936:63-4)もこれに従うが、こうした不定称をフランス語のon、ドイツ語のmanにたとえている。知里(1942:505-6)は「不定称」を「一般称(generic person)」と呼び変えてはいるが、解釈に大きな差異は見られない。その後、浅井(1969:778)は受動形の形成に用いられる要素を「不定人称」と呼び、「受身の表現において、動詞の主格接語としても用いられる」とのべている。田村(1972:34)も「不定人称」という用語を用い、知里論文同様フランス語やドイツ語にたとえている。田村(1988:30)もやはり受動文を不定人称接辞の用法の中で扱っている。

以上からわかるように、従来のアイヌ語の受動文の記述は、動詞が、受動文においては、「不定の人々」を表す人称的要素をとる、という、動詞の形態論の記述にとどまっており、受動文の中の他の要素については、ほとんど注意が払われてこなかった、といえることができる。また、アイヌ語の受動文を、ドイツ語やフランス語の類似した構造にたとえることが、はたして適切かどうか、という問題も、深く追究されないまま残されている。

さて、以上の伝統的なアイヌ語研究の立場に対し、柴谷(Shibatani 1985 a: 824)は、動詞の形態法から一步踏み出して、受動者の統語的資格を問題とする。柴谷は、石狩方言の資料である砂沢(1983)から、次の例文(13)のような例をあげ、この文における受動者 e-kor hampe「おまえの父」の統語的役割は、語順の点からは主語のようにもみえるとのべている(Shibatani 1985 a: 824)。

(13) e-kor hampe eper orowa an-rayke

2sg.-have father bear from PASS-kill

'Your father was killed by a bear.' (Sunasawa 1983: 48)

しかし、この時点では、柴谷はさらに金田一(1931)から引用した例文(14)のような例をあげて、この場合、受動文の動詞が不定人称主格形 a- をとり、

受動者は1人称目的格形 *i-* で表示されて、自動詞ではなく他動詞の形態法を示していることから、受動文の受動者の主語性には懐疑的な態度を取っている。

- (14) *kamui kat chashi upshororke a-i-o-reshu*
 god build castle inside PASS-1sg. -in-raise

'I was raised in a god-built mountain castle.' (Kindaichi, 239)

しかしながら、具体的な統語上の証拠は挙げていない。しかし、その後、柴谷 (Shibatani 1990: 58-59) は、語順(受動者が文頭に立つ傾向があること)に加え、さらに金田一(1931)から例文(15)のような例をあげ、受動文の受動者が尊敬化を引き起こす(動詞が複数形をとる)ことから、受動者名詞句を主語であるとする。

- (15) *nekonan-kur a-o-res-pa*
 what kind of person PASS-APPL-raise-PL

'What kind of person is being raised.'

しかしながら、まず、語順について言えば、受動者名詞句は必ずしも文頭に立つとは限らない。以下のように文中に現れることも少なくない。

- (16) *to'an nispa 'oro wa ta'an kur 'a-φ-kusa 'a ruwe?* 「あの旦那さんにこの人⁴⁾が(向こう岸へ舟で)渡されたのか」: *to'an* 「あの」、*nispa* 「旦那さん」、*'oro* 「～の場所、所」、*wa* 「から」、*ta'an* 「この」、*kur* 「人」、*'a-* 受動、*φ-3* 人称目的格、*kusa* 「渡す」、*'a* 過去、*ruwe* 「の」(千歳方言、白沢ナベ氏 [1905-1993] による)

また、アイヌ語の動詞の複数形は、他動詞の場合、目的語の複数を示すのが普通であり(田村 1988: 19)、受動者が動詞の複数化を引き起こすからと言って、受動者が主語であることを保証するものではない。次の能動文では明かに目的語が動詞の複数化を引き起こしている。

- (17) *to'an katkemat cep sinep to'anuka 'utar korpore* 「あの奥さん魚を一匹あの人たちにあげる」: *to'an* 「あの」、*katkemat* 「奥さん」、*cep* 「魚」、*sinep* 「一匹」、*to'anuka* 「あれらの」、*'utar* 「人々」、*korpore* 「あげる(複数形)」(千歳方言、白沢ナベ氏による)

以上のように、従来のアイヌ語の受動文に関する解釈は動詞の形態法に偏っており、それに対する疑義もあるものの、統語的な分析がいまだ不十分であると言える。柴谷(Shibatani 1990:58)が述べているように、主語、目的語のような文法関係が、形態上の格だけからは決定しがたい面があることを考慮すれば、統語的な証拠をさらに追究する必要があると思われる。

5. 再帰接頭辞と受動文

受動文の受動者の統語的性質を明かにするため、まず、再帰接頭辞と受動文の関係をみることにしたい。

限られた表現においてはあがあるが、他の多くの言語と同様、アイヌ語においても、再帰的要素が、主語（または主格の人称接辞）によって引き起こされる。

まず、例文(18)をみればわかるように、「後ろ」という位置を表す名詞 'osmak は、人称接辞をとって、その人称接辞が指示するものからみた位置関係を表す。この場合は1人称単数目的格 'en- をとり、「私の後ろ」という関係を表している。

- (18) 'en-'osmak ta nen ka ϕ -sinuynak wa ϕ -'an 「私の後ろに誰か隠れている」：'en- 1人称単数目的格，'osmak 「後ろ」，ta 「に」，nen 「誰」，ka 「か」， ϕ -3人称主格，sinuynak 「隠れる」，wa 「て」，'an 「いる」

しかしながら、例文(19)のように、主語の人称（この場合は1人称）と位置名詞の人称が同一指示的な場合は、位置名詞は主語の人称（この場合は1人称）にかかわらず再帰的接頭辞 si- 「自分」をとる（'en- をとらない）。

- (19) si₁-'osmak 'un ku₁-'inkar 「自分の後ろを私は見る」：si- 再帰接頭辞，'osmak 「後ろ」，'un 「へ」，ku- 1人称単数主格，'inkar 「見る」

そこで、受動文における受動者と、位置名詞の人称が、同一指示的である場合に、位置名詞が再帰接頭辞、人称接辞のいずれをとるかが問題となる。もし、受動文の受動者が主語として機能しているのであれば、位置名詞は3

人称のゼロではなく、再帰接頭辞 si-「自分」をとると予想される。しかしながら、実際には、例文(21)のように、例文(20)の能動文の受動者の場合と同様、受動文においても位置名詞は3人称のゼロ形式をとり、再帰接頭辞 si-をとらない。もし例文(21)のような受動文で、3人称のゼロの代わりに再帰接頭辞 si-をとった位置名詞を用いると、不適格な文となる(例文(22))。

- (20) wenkamuy 'utar nispa_i φ_i-'osmake wa φ-φ-toykokik 「悪い神たちが旦那さんを後ろから強くたたく」: wenkamuy 「悪い神」, 'utar 「たち」, nispa 「旦那さん」, φ-3人称目的格, 'osmake 「後ろ」⁵⁾, wa 「から」, φ-3人称主格, φ-3人称目的格, toykokik 「強くたたく」
- (21) nispa, wenkamuy 'utar 'or wa φ_i-'osmake wa 'a-φ-kik 「旦那さんが悪い神たちに後ろからたたかれる」: nispa 「旦那さん」, wenkamuy 「悪い神」, 'utar 「たち」, 'or 「場所, 所」, wa 「から」, φ-3人称目的格, 'osmake 「後ろ」, 'a-受動, kik 「たたく」
- (22) * nispa_i wenkamuy 'utar 'or wa si_i-'osmak wa 'a-φ-kik 「旦那さんが悪い神たちに後ろからたたかれる」: nispa 「旦那さん」, wenkamuy 「悪い神」, 'utar 「たち」, 'or 「場所, 所」, wa 「から」, si-再帰接頭辞, 'osmak 「後ろ」, 'a-受動, kik 「たたく」

したがって、再帰接頭辞 (si-) の用法に関しては、受動文の受動者名詞句は、主語に昇格せず、目的語のままであると考えられる。

6. 埋め込み構造と受動文

次に、埋め込み構造と受動文の関係についてみることにする。ここで問題にするのは、願望の助動詞 rusuy 「～したい」を含む埋め込み構造である。

まず、例文(23)を見ると、この文は、「団子を食べる」人と、それを願望する人とが同一指示的である場合である。これに対し、例文(24)は、「大きくなる」人と、それを願望する人とが別人である場合である。この場合、補文標識 hi 「こと」が現れ、願望する人の人称が、語彙的な内容の無い、形式的な動詞 ki

「する」に表示される。従って、(23)のような文も、基底では(25)のような構造をしているが、派生の段階で同一指示的な要素（この場合は ku- ki の ku-）の削除と、それに伴う刈り込み（代動詞 ki, 補文標識 hi の削除）が行われるのだと考えられる。すなわち、例文(23)のように、主文の主語（又はその人称）と、補文の主語（又はその人称）が同一指示的である場合に限り、要素の削除が起こるのであると考えられる。

(23) sito ku- ϕ -e rusuy 「団子を私が食べたい」: sito 「団子」, ku- 1 人称単数主格, ϕ - 3 人称目的格, 'e 「食べる」, rusuy 「たい」

(24) korsi 'utar 'emkota ϕ -poro hi ku- ϕ -ki rusuy 「子どもたちに早く私は大きくなってもらいたい」: korsi 「子供」, 'utar 「たち」, 'emkota 「早く」, ϕ - 3 人称主格, poro 「大きくなる」, hi 補文標識, ku- 1 人称単数主格, ϕ - 3 人称目的格, ki 「する」, rusuy 「たい」

(25) [_s [_s sito ku-'e] [_{COMP} hi]] ku-ki rusuy

そこで、受動文が補文に埋め込まれ、なおかつ受動文の受動者と主文の主語の人称が、同一指示的である場合に、いずれの構文をとるかが問題となる。5 節において示したように、再帰接頭辞の用法に関して、受動文の受動者は主語的には働かなかった。したがって、いま問題となっている埋め込み構造においても、主語的には働かないと予想される。すなわち、主文の主語の人称接辞や補文標識の削除を引き起こさないのであろうと考えられる。この予測は、例文(26)のような例によって裏付けられる。すなわち、動詞 ki や、補文標識 hi の削除が起こっていない。これに対し、削除が適用された(27)のような文は不適格な文とされる。

(26) to'on korsi 'unarpe 'or wa 'a- ϕ -'omap hi ϕ -ki rusuy kotom ϕ -'an
「あの子、おばさんにかわいがってもらいたいらしい」: to'on 「あの」、
korsi 「子」, 'unarpe 「おばさん」, 'or 「場所、所」, wa 「から」, 'a- 受動、
 ϕ - 3 人称目的格, 'omap 「かわいがる」, hi 補文標識, ϕ - 3 人称主格、
ki 「する」, rusuy 「たい」, kotom 「ように」, ϕ - 3 人称主格, 'an 「ある」

(27) *to'on korsi 'unarpe 'or wa 'a- ϕ -'omap rusuy kotom ϕ -'an 「あの子、おばさんにかわいがってもらいたいらしい」: to'on 「あの」、korsi

「子」, 'unarpe「おばさん」, 'or「場所, 所」, wa「から」, 'a-受動, ϕ -3人称目的格, 'omap「かわいがる」, rusuy「たい」 kotom「ように」, ϕ -3人称主格, 'an「ある」

なお, 埋め込み文に関連して, 例文(28)が適格な文であるということが注意される。

- (28) korsi 'utar 'anak ϕ -'ipokas konno, na 'a- ϕ -'omap rusuy pe ne na
 「子供たちは, 器量が悪いと, なおのこと (ふびんで) 人がかわいがりたく思うものだよ」: korsi「こども」, 'utar「たち」, 'anak「は」, ϕ -3人称主格, 'ipokas「醜い」, konno「と」, na「なお」, 'a-受動, ϕ -3人称目的格, 'omap「かわいがる」, rusuy「たい」, pe「もの」, ne「だ」, na「よ」

例文(26)と(28)の大きな違いは動作主を伴っているか否かにあると考えられる。動作主を伴う場合には, 受動を表す, いわゆる不定人称接辞の 'a- が, 不定人称の主格人称接辞というよりはむしろ, 受動を表す形式上の要素に近付いていると考えることができる。そのため例文(27)のような構文を許さないものとみられる。これに対し, 例文(28)は, 'a- は不特定とはいえ, 「人間」という意味を表しており, 意味的に包括的1人称複数他動詞主格と接近しているといえる。このように例文(26)と(28)は, 動詞の形態は共通しているが, その統語的なふるまいは, 必ずしも同一ではない。したがって, これらの文における 'a- という接辞は従来は「不定人称」に一括されてきたが, 一応, 両者, すなわち主格的な不定人称と受動表示の要素とを区別して考える必要があると思われる。さらに言えば, 受動のマーカ- 'a- (または 'an-, 以下 'a- で代表させる) は, 形は包括的1人称主格接辞, 不定人称主格接辞の 'a- と同じだが, 他の人称接辞とは根本的に異なり, 呼応する人称代名詞 (この場合予想されるのは 'anoka) を絶対に表面に引き起こせない点が注意される。また, これまであげた例文はすべて動作主が有生物の場合であったが, 次のように無生物が動作主になる受動文も可能である。

- (29) rera 'ani cikuni 'opitta 'a- ϕ -horakte wa ϕ -'oka 「風で木が倒されている」: rera「風」, 'ani「で」, cikuni「木」, 'opitta「みな」, 'a-受動,

φ- 3 人称目的格, horakte 「倒す」, wa 「て」, φ- 3 人称主格, 'oka 「いる」(千歳方言)

この場合、受動のマーカ- 'a- は少なくとも人間ではあり得ず、包括的 1 人称主格や不定人称主格とは意味的に直接結び付かない。これらから考えて、受動のマーカ- 'a- は主語と呼応し、その人称を表示するという、他の主格人称接辞が有する機能を持たないと考えらるべきであろう。

以上から結局、アイヌ語の受動文は、受動者が主語的に機能しないのみならず、いかなる主語も有しないタイプの構造であると結論付けられる。

1. アイヌ語の受動文の類型論的位置

近年、言語類型論の見地から、諸言語のさまざまなタイプの文法構造が研究されるようになり、従来同じ文法用語で呼ばれてきた現象も、諸言語によって様々な性質の違いのあることが改めて明かになってきている(例えば、「主語」のような概念)。しかし、他方、それらを全く個々別々の文法現象として記述するのではなく、典型的な特徴(プロトタイプ)を設定することによって諸言語の類型論的な位置付けを行おうとする試みもなされてきている(柴谷 1985b: 8)。また、「主語」、「目的語」といった文法関係も、形態上の格のみならず、意味的・統語的特徴によって考える傾向が強まっている(柴谷 1985b: 10)。受動文も、このような研究の中心的な研究対象の一つとなっており、従来、受動文の特徴と考えられてきたものも、修正や拡張を迫られつつある。その一つとして、能動文の目的語と受動文の主語との関係があげられる。従来、受動文の一般的な特徴付けとして、能動文の目的語が受動文の主語となる結果、能動文の主語は削除されるか、斜格におとされると考えられる傾向があった(Perlmutter and Postal 1983 等)。しかし、受動文において、能動文の目的語が主語とならず、目的語のままとどまる言語(例えばウェールズ語)の例が目立って、目的語の昇格よりもむしろ主語の降格や削除が、受動文一般を特徴づける性質として、より本質的であるとする主張もなされて

いる (Comrie 1977 等)。このようなタイプの受動文は、主語が存在しないか、たとえ存在しても形式主語 (dummy subject) であるものであり、非人称受動 (impersonal passive) と呼ばれる (Siewierska 1984 : 93)。上の考察によって、アイヌ語の受動文は、形態的のみならず統語的な現象についても非人称受動の特徴を示すと言える。では、アイヌ語の非人称受動構文は、他の類似の構造を持つ言語と比べて、どのような特徴を持っているのだろうか。

非人称受動の包括的な類型論的分類は Khrakovsky (1973 : 67) にみられる (以下の例では、C は Complement, Pr は Predicate, Sub は Subject の略。数字は機能を区別するためのもの。Khrakovsky [1973 : 61] による)。

a. 主語を持たず、動詞が能動文の場合と異なる形態法をとるもの。

例：ポーランド語

(30) Stefana (C₁) poslano (Pr) na front

‘Stefan was sent to the front’ (Khrakovsky 1973: 67)

b. 形式主語をとり、動詞が能動文の場合と異なる形態法をとるもの。

例：ドイツ語

(31) Es (Sb) wird getanzt (Pr)

「ダンスが踊られる」 (Khrakovsky 1973 : 68)

c. 主語を持たず、動詞が能動文の形態法をとるもの。

例：ポーランド語

(32) Stefana (C₁) poslali (Pr) na front

‘Stefan was sent to the front’ (Khrakovsky 1973: 67)

例：ロシア語

(33) Burej (C) povalilo (Pr) derevo (C₁)

‘The tree was knocked over by the storm’ (Khrakovsky 1973: 67)

d. 形式主語をとり、動詞が能動文の形態法をとるもの。

例：フランス語

(34) On (Sb) vend (Pr) la maison (C₁)

「人が家売る (=家が売られる)」(Khrakovsky 1973 : 68)

既に5節と6節でみたように、アイヌ語の受動文は主語を持たず、動詞は能動文の形態法をとる。従って、この枠組みの中ではcのタイプに属することができる。なお、Frajzyngier(1982 : 288)は、非人称受動を有する多くの言語(ポーランド語、トルコ語、ラテン語、スペイン語、イタリア語、アラビア語、オランダ語、ドイツ語)で、(表面に現れない場合でも)動作主は人間でなければならないことを指摘している。この点ではむしろロシア語やアイヌ語は特殊な例である可能性がある。なお、Siewierska(1984 : 100)によれば、通言語的にみて、非人称受動態は動作主を明示しない傾向があると言う。この点よりみて、やはりロシア語は逸脱しており、アイヌ語の非人称受動も類型論的にはロシア語の例と同様、有標なタイプのように思われる。

8. まとめ

アイヌ語の受動文は、動詞の形態法で能動文と類似(包括的1人称複数他動詞主格と類似の形式をとる)し、のみならず統語的(再帰化、削除)にも、受動者を主語に昇格させないタイプの非人称受動文の一種である。類型論的には、非人称受動であるにもかかわらず動作主を明示できるという点に大きな特徴がある。

註

*本稿は1988年10月23日の第97回日本言語学会大会(神戸大学)での口頭発表に基づいている。その折御意見を賜った諸先生に感謝申し上げる。

1) これらの人称を表す要素が接辞であるか付属語であるかは議論のある所であるが、こ

アイヌ語の受動文に関する一考察

- ここでは便宜上接辞として扱う。なおこの問題に関しては(服部 1961)を参照。
- 2) ここでは静内方言の体系を示す。人称接辞の体系は方言によって差異がある(田村 1988: 25)。
 - 3) 静内方言では、包括的1人称複数他動詞主格, 2人称敬称, 受動を表す接頭辞には 'a- と 'an- の二つの形がある。両者はまったく置き換えが可能な場合もあるが, 少なくとも受動の場合, 'a- は1人称単数目的格 ('en-) と結合して 'a-'en- という形式で現れ, 'an- は包括的1人称複数目的格 ('i-), 2人称単数目的格 ('e-), 2人称複数目的格 ('eci-) と結合して, それぞれ, 'an-i-, 'an-e-, 'an-eci- という形式で現れる。
 - 4) 直訳的には「この人」だが, 実際は話し相手(特に自分の夫)を指す。日本語の「あなた」に似た言い方(佐藤 1991: 99)。
 - 5) 位置名詞 'osmak は3人称のゼロ要素の場合は 'osmake となる。

参考文献

- 浅井 亨. 1969. 「アイヌ語の文法——アイヌ語石狩方言文法の概略」. アイヌ文化保存対策協議会(編). 『アイヌ民族誌』下巻. 東京: 第一法規. 771-800.
- 知里真志保. 1936. 『アイヌ語法概説』. 東京: 岩波書店. (『知里真志保著作集』第4巻. 東京: 平凡社, 1975 所収.)
- . 1942. 「アイヌ語法研究」. 『樺太庁博物館報告』第4号. 豊原: 樺太庁博物館. (『知里真志保著作集』第3巻. 東京: 平凡社. 1973 所収.)
- Comrie, B. 1977. In Defense of Spontaneous Demotion: The Impersonal Passive. Cole, P. & J. Sadock (eds). *Syntax and Semantics 8. Grammatical Relations*. New York: Academic Press. 47-58.
- . 1988. Passive and Voice. Shibatani, M. (ed.) *Passive and Voice*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 9-23.
- Frajzyngier, Z. 1982. Indefinite Agent, Passive and Impersonal Passive: A Functional Study. *Lingua* 58. 267-290.
- 服部四郎. 1961. 「アイヌ語カラフト方言の「人称接辞」について」. 『言語研

究』第39号。1-20.

Khrakovsky, V. S. 1973. Passive Construction. Kiefer, F. (ed.) *Trends in Soviet Theoretical Linguistics*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company. 59-75.

金田一京助. 1931. 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』2. 東京: 東洋文庫.

Perlmutter, D. M. 1978. Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis. *BLS* 4. 157-189.

Perlmutter, D. M. & P. M. Postal. 1983. Toward a Universal Characterization of Passivisation. Perlmutter, D. M. (ed.) *Studies in Relational Grammar 1*. Chicago: Chicago University Press. 3-29.

佐藤知己. 1991. 「アイヌ語千歳方言における自称詞と対称詞について」.
『日本研究』第5集. 京都: 国際日本文化研究センター. 89-104.

Shibatani, M. 1977. Grammatical Relations and Surface Cases. *Language* 53, no. 4. 789-809.

———. 1985a. Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis. *Language* 61, no.4. 821-848.

———. 1985 b. 「主語プロトタイプ論」. 『日本語学』第4巻第10号.
東京: 明治書院. 4-16.

———. 1990. *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Siewierska, A. 1984. *The Passive*. London: Croom Helm.

砂沢クラ. 1983. 『私の一代の思い出』. 札幌: みやま書房.

田村すゞ子. 1972. 「アイヌ語沙流方言の人称の種類」. 『言語研究』第61号.
17-39.

———. 1988. 「アイヌ語」. 亀井孝他(編). 『言語学大辞典』第1巻. 東京: 三省堂. 6-94.